

大学生の心理的ストレス過程に及ぼす親和動機の影響

古 屋 健 (立正大学心理学部)

The influence of affiliative motive on psychological stress process in university students

Takeshi FURUYA (*Faculty of Psychology, Rissyo University*)

Abstract

In this paper, I have studied the influence of affiliation motive on psychological stress process of university students. Interpersonal Orientation Scale (Hill, 1987), Interpersonal Stressor Scale (Hashimoto, 2005), and Psychological Stress Response Scale (Niina, 1994) were administered to 86 undergraduates. Correlational analysis revealed that attention and social-comparison motives were significantly correlated with stressor of interpersonal friction, social-comparison motive was significantly correlated with anxiety and depression, and that positive-stimulated motive was closely correlated with positive-emotion. Results of ANOVA showed that persons with stronger attention motive were more sensitive to stressor of interpersonal blunder, that is, they were more anxious and depressive under low-stress condition.

Key words : psychological stress process, affiliation motivation, interpersonal stressor, university student

問 題

情動を中核とする心理的ストレス・モデル (古屋・音山, 1999; 古屋・坂田・音山, 2001; 新名, 1995) によれば、ストレッサーとなりうる刺激事態を経験すると、その感情的インパクトの強さに応じたネガティブな情動反応が生じ、有効なストレス・コーピングがなされず高い水準で反応が長期間持続するような場合、心理機能の低下による二次反応や身体反応が生じ、最終的に心理的適応が障害されることになる。このプロセスにおいて、個人差をもたらすさまざまな外在的要因が関与する。たとえば、情動調整スキル、社会的スキル、性格特性等の個体要因は、心理的ストレス過程の諸局面に作用し、ストレッサーのインパクトの程度や反応の生起水準に大きな影響を与える。また、古屋・坂田・音山 (2001) は外在的要因としてのビッグ5性格特性の影響について、刺激事態の経験の有無、その感情的インパクトの大きさ、情動反応や二次反応・身体反応の生起水準に対し、特性によって異なる影響を及ぼすことを明らかにした。本研究では、そのような外在的要因のひとつとして、個人の親和動機の強さがストレス過程に及ぼす影響について検討した。

親和動機の分類

親和動機とは、他者と一緒にいること、あるいは他者との社会的接触を求め、それによって得られる社会的報酬 (Buss, 1986) を求める動機である。Hill (1987) は、他者との親和によって追求される社会的報酬の内容の違いから、親和動機を4つの下位タイプに分け、各タイプの強さの個人差を測定するための対人志向性尺度 (Interpersonal Orientation Scale : IOS) を開発した。Hillによる下位タイプのひとつは、対人的な親密さやコミュニケーションと結びついた他者からのポジティブな行動 (親密さや愛情) とそれに伴って経験されるポジティブな感情 (喜び) であり、Hillはこれをポジティブ刺激 (positive stimulation) 動機と呼んだ。これは親和動機が求める主要な社会的報酬である (Murray, 1938; Buss, 1983)。2番目のタイプの社会的報酬は他者からの承認、賞賛、尊敬で、ポジティブな印象を持つ人に取り囲まれていたいという親和傾向である。これは注目 (attention) 動機と呼ばれる。

3番目のタイプは社会的比較 (social comparison) への動機である。社会的比較理論 (Festinger, 1954) によれば、人は正しく自己評価するよう動機づけられており、物理的現実によって自己評価することができない場合、社会的現実によって自己評価しようとする。

そのため、自己評価の不確実性が高まった状況では、社会的比較情報を求めて親和傾向が高まることが予想される。Schachter (1959) は、新奇な場面で不安を高められると、類似した状況に置かれた他者への親和傾向が高まることを実験的に明らかにし、社会的比較が親和行動を動機づける報酬のひとつであることを示した。また、Schachter (1959) によれば、他者と一緒にいることは不確実性を低減するだけでなく、相互の慰めや支援によって不安を軽減する効果もあることも示唆されている。このことから、社会的比較とは別に、ネガティブな感情を緩和・低減するために他者からの共感、同情、援助を求めて親和行動が動機づけられることが明らかである。Hill はこれを第4のタイプとして情緒的支持 (emotional support) 動機と呼んだ。

なお、Schachter (1959) にはじまる親和傾向の研究では、必ずしも社会的比較理論による予測が一貫して支持されてきたわけではない。そこで、Rofé (1984) はストレスと親和傾向に関する主要な研究知見をレビューした上で、親和傾向は他者と一緒にいることで生じる利益と損害の大きさ (効用) の関数であり、それは状況の特徴、個人の特徴および潜在的親和対象の特徴の3要因によって規定されるとする効用理論 (utility theory) を提起した。この理論に基づけば、ストレスと親和動機との関係を見る時、親和動機がストレス過程に及ぼす影響だけでなく、ストレスの特徴が親和傾向に及ぼす影響や、潜在的親和対象の特徴が実際の親和行動に及ぼす影響などについても問題提起することができる。たとえば、Hill (1991) の実験では、IOSで測定された情緒的支持動機が強い人は、相手が暖かい人物でサポートを得ることが期待できる場合でのみ強い親和傾向を示し、サポートが期待できない相手の場合は親和傾向を示さなかった。また、ポジティブ刺激動機の強さでも同様な効果が認められた。この結果は実際の親和行動が親和動機のタイプと潜在的親和対象の特徴との交互作用による影響を受けることを示している。

心理的ストレス過程への影響

本研究の目的は個人の特性的な親和動機が、心理的ストレス過程に及ぼす影響を検討することである。Hill の分類によるタイプの異なる親和動機は、ストレス過程に対してもそれぞれ特有な影響を及ぼすことが予想される。まず第1に、親和動機のタイプによって経験されやすいストレスの内容は異なることが予想される。親和動機は他者との社会的接触から得られる報酬を求めるものであることから、親和動機が強い人にとって、ストレスとなる刺激事象の中でも対人関係の中で生じる出来事の重要性は高いと考えられる。さらに、タイプによって求める社会的報酬が異なるた

め、ストレスとなる出来事の特徴にも違いが生じるであろう。性格特性や対人行動特性によって経験される対人ストレスの内容が影響を受けることは、対人ストレスを検討した橋本によって明らかにされている。橋本 (1997) は対人ストレスイベントを対人葛藤 (interpersonal conflict, 他人の行動に起因する顕在的な葛藤状況)、対人劣等 (interpersonal inferiority complex, 自分に起因する劣等感を触発する事態)、対人摩擦 (interpersonal friction, 配慮や気疲れを伴う人間関係) の3つに分類し、特性シャイネス傾向の強い人ほど対人劣等イベントを経験しやすいことを明らかにした。ただし、対人葛藤を引き起こしやすいと予想された短気傾向は対人ストレスイベントすべてと関連していた。橋本 (2005) はこの分類を踏まえて、家族、友人など特定の人間関係で経験されるストレスを測定するための対人ストレス尺度を開発した。この尺度では対人劣等が対人過失 (interpersonal blunder, 自分に非があり相手に不快な思いをさせた事態) として再定義された。そこで本研究では、大学生を対象に、この尺度を用いて友人関係の中で経験される対人ストレスを測定し、親和動機のタイプによって経験されるストレスの違いがあるかどうかを検討した。ただし、親和動機の強さはスキルや能力とは関係がないことから、他者に起因する対人葛藤や自分に起因する対人過失との関連は考えられない。達成動機との関連が予想されるのは対人摩擦ストレスである。対人摩擦ストレスとは相手への配慮から人間関係の中でネガティブな心情の表出を抑制するような事態のことであり、他者からの賞賛を求める傾向が高い注目動機、他者とのポジティブな交流を求めるポジティブ刺激動機が高い人ほど相手からのネガティブな反応を恐れてそのような経験をする人が多いことが予想される。

第2に、特性親和動機がポジティブまたはネガティブな情動性と相関している場合、ストレス経験とは無関係に定常的な情動の生起水準を高める可能性がある。特にネガティブな情動性との関連が予想されるのが社会的比較動機である。元来、社会的比較と親和傾向との関係は、Schachter の親和研究においては実験的に喚起された不安に起因するものとして考えられてきた。社会的比較欲求を高める要因が不安であるとすれば、特性的な親和動機が高い人は潜在的に不安傾向が高いと考えられる。また、ポジティブ刺激動機が高い人は社交的で人付き合いを好む傾向があり、ビッグ5性格特性の外向性と共通する特徴がある。外向性はポジティブな情動性と相関することから、ストレス反応を抑制する高揚感の水準が高い可能性がある。本研究ではストレス反応を新名の心理的ストレス反応尺

度50項目改訂版（以下、PSRS-50R と略記）を使って測定し、ストレスラーによって引き起こされるネガティブな情動として不安、抑うつ気分、怒りの強さを調べるが、ポジティブな情動を測定するための尺度も併用し、親和動機との関連を検討することにした。なお、PSRS-50R では対人行動領域における二次反応として引きこもり、対人不信、および依存の強さを測定することができる。これらの尺度はネガティブな情動反応との関係で二次反応として解釈すべきかどうか判断されるべき行動特性であるが、特性親和動機と相関する可能性がある。たとえば、情緒的支援動機が高い人は他者への依存傾向が基本的に高いことが予想される。そこで本研究では PSRS-50R のうち対人領域の二次反応との関連についても探索的に検討した。

第3に考えられる親和動機の影響は、経験されたストレスラーに対する感受性への効果である。たとえば、先に述べたように親和動機の強さは対人葛藤や対人過失といった出来事の生起に影響を与えるとは考えにくい。しかし、同じレベルの対人葛藤や対人過失ストレスラーを経験したとしても、その経験の感情的インパクトの大きさは親和動機の強さによって異なる可能性がある。たとえば、親密な関係性を求めるポジティブ刺激動機の高い人にとって、友人関係のトラブルは、その原因がどこにあるにせよ、親和動機の充足を妨げる深刻な事態として大きな感情的インパクトを持つことが推測される。それに対して、他者からの賞賛を求める注目動機の高い人にとっては、他者に起因するトラブルより、自分に起因するトラブルの方が自分に対する他者の評価に関わるために感情的インパクトへの影響はより大きいと予想される。社会的比較動機についても、自己に起因する出来事は自己評価の低下を伴うために、相対的に感情的インパクトは大きくなるであろう。このような関係は、ストレスラーがストレス反応を引き起こす過程で親和動機の高さが調整変数としての役割を果たしていることを意味している。

本研究の仮説

以上の検討を踏まえ、本研究では親和動機が心理的ストレス過程に及ぼす影響について以下の仮説を立てて分析した。

経験するストレスラーに関する仮説：注目動機およびポジティブ刺激動機が高い人ほど対人摩擦ストレスラーを経験することが多いであろう。

心理的ストレス反応との相関に関する仮説：社会的比較動機が高い人は不安反応が高いであろう。また、ポジティブ刺激動機が高い人はポジティブな情動性と相関が高いであろう。

ストレスラーとの交互作用：ポジティブ刺激動機の高い人は対人葛藤および対人過失ストレスラーを経験

すると大きな感情的インパクトを受けるであろう。注目動機あるいは社会的比較動機の高い人は、対人過失ストレスラーを経験すると大きな感情的インパクトを受けるであろう。

方法

参加者

心理学関連科目の講義時間の一部を利用して大学生86人に質問紙への回答を求めた。年齢は19歳～22歳で、内訳は男子31人、女子55人である。

質問紙の構成

A. ストレス反応

ストレス反応については、ネガティブな情動を中心に測定する心理的ストレス反応尺度、ストレスが高まると低下するポジティブな情動である高揚感を測定する尺度、および身体的自覚症状を測定する身体反応尺度を使って測定した。

心理的ストレス反応尺度（以下、PSRS-50R）：PSRS-50R は新名（1994）によって開発され、心理的ストレス反応の中核となる情動反応領域について抑うつ気分、不安および怒りの3下位尺度各6項目と二次的反応として意欲反応領域の自信喪失、無気力、絶望の3下位尺度各4項目、思考反応領域の思考力低下と侵入的思考の2下位尺度各4項目、および対人反応領域の孤立、依存、対人不信の3下位尺度各4項目から構成されている。本研究では参加者の負担を考慮して情動領域3下位尺度と対人反応領域3下位尺度のみを使用した。本研究では「この1週間」に各項目に述べられたような状態をどのくらい経験したかを5件法（「0. 全くなかった」～「4. 大体いつもあった」）で自己評定を求めた。

高揚感尺度：ポジティブな情動反応を測定するために古屋・坂田・音山・所澤（1994）による高揚感尺度を利用した。これは気分の高揚した状態を表す5項目（はつらつとした気分である、いきいきしている、軽快な気分だ、気分がのっている、気力が満ちている）から成り、PSRS-50R と同様、各項目について過去1週間の内にどのくらい経験したかを5件法「0. まったくなかった」～「4. 大体いつもあった」で評定させるものである。

身体反応尺度：古屋・坂田・音山（2001）による身体的ストレス反応尺度25項目に「その他」と「特になし」を加えた27項目を利用した。これはストレスと関連が深いとされる身体症状をリストしたもので、各症状項目に対して測定時前1週間に自覚症状として認められた賞状をチェックするよう求めた。以下の分析では26項目のうちで自覚症状として認められた症状項目の数を身体反応得点とした。

B. 人間関係ストレス

本研究では、親密な友人関係の中で経験したストレスと、友人関係以外の対人関係の中で経験したストレスについて別個に測定した。

対友人ストレス尺度：橋本（2005）は全般的対人関係から特定二者関係までのさまざまな対人関係における対人ストレスを測定するための尺度を開発した。この尺度は、3つの下位尺度から構成されている。

1) 対人葛藤ストレス

「○○からけなされたり、軽蔑された」、「あなたを信用していないような発言や態度をされた」といった他者が自分に対してネガティブな態度や行動を表出する事態

2) 対人過失ストレス

「あなたのミスで友人に迷惑や心配をかけた」、「友人の仕事や勉強、余暇のじゃまをしてしまった」といった、自身に非があって相手に迷惑や不快な思いをさせてしまうような事態

3) 対人摩擦ストレス

「その場を収めるために、本心を抑えて○○を立てた」、「○○の機嫌を損ねないように、会話や態度に気を使った」といった、自他共にネガティブな心情や態度を明確に表出したりしないが、円滑な対人関係を維持するためにあえて意に添わない行動をしたり、相手に対する期待外れを黙認するような事態

実際の質問では「○○」に当たる部分を「友人」として、身近な友人関係の中で経験したストレスについて質問した（以下、下位尺度は対友人葛藤尺度、対友人過失尺度、対友人摩擦尺度と呼ぶ）。3下位尺度各6項目から構成され、「1. まったくなかった」～「4. しばしばあった」の4件法で回答を求めた。

対人ストレス尺度：古屋・音山・坂田（2001）が作成した大学生用のストレス尺度の学業ストレスに関する項目を除いた対人ストレス項目について、「友人関係以外の人間関係で、以下のような出来事や状況を経験しましたか」という教示で経験の有無を2件法で回答させ、経験された場合には「その出来事や状況をどの程度困った、つらい、負担だ、ショックだ、不快だ、嫌だ、わずらわしいなどと感じましたか」という教示で経験のインパクトを4件法（「0. 感じなかった」～「3. 非常に感じた」）で自己評定を求めた。

C. 親和動機

Hill（1987）の対人志向性尺度（IOS）の日本語版である親和動機測定尺度（岡島，1988）を利用した。辛いときにそばにいてほしい気持ちを表す「情緒的支持」（例「物事がうまくいかない時、人と一緒にいることが

一番の慰めになる」 「悲しいときや落ち込んでいるとき、自分の周囲にいる人に慰めてもらおうとする」）、接触によって得られる活気や楽しさを表す「ポジティブ刺激」（例「いろいろな人と一緒にいて、その人たちについて知ることは興味深い」 「私は、他者と一緒にいることで多くの人が感じる以上に満足がえられる」）、自己評価のために比較対象としての他者を求める「社会的比較」（例「自分と比較するために人に注目することがある」 「仕事で、あるいは、別の場面で自分が何かしてよいのかわからないとき、手がかりとして人を見る」）、自分の存在価値を認めてくれる人と一緒にいたいという気持ちを表す「注目」（例「私らしさや私のすることに共感してくれる人のそばにいたいと強く思う」 「私の存在価値を認め、大切に思ってくれる人のそばにいたい」）の4つの下位尺度、全25項目から構成されている。「1. 全く違う」～「5. まったくその通りだと思う」の5件法で回答を求めた。

結果

尺度得点

親和動機、ストレスおよびストレス反応に関する各尺度の尺度得点の男女別平均と差の検定結果を表1に示した。有意な性差が認められたのは親和動機尺度の注目動機尺度、ストレス尺度の対友人摩擦尺度、そして心理的ストレス反応尺度の不安尺度で、いずれも男子より女子で高かった。性差は限定的であったことから、以下の分析において性別の要因は無視することとした。

尺度間相関

親和動機のタイプによって経験されるストレスが異なるかどうかを検討するため、親和動機尺度得点とストレス尺度得点の相関係数を算出した。表2に示す通り、対友人摩擦と注目動機および社会的比較動機との間に有意な正の相関が認められた。注目動機または社会的比較動機が強いほど、対友人摩擦ストレスを経験しやすいことが示唆された。

次に、親和動機およびストレスとストレス反応との相関を見た（表3参照）。不安、抑うつ気分、対人不信および依存については、すべてのストレス下位尺度と有意な中程度の相関が認められた。怒りについては対友人葛藤と対人ストレスとの間に中程度の相関が、対友人摩擦との間に弱い相関が認められたが、対友人過失との間には有意な相関は認められなかった。引きこもりについて対友人葛藤および対人ストレスとの間に中程度の相関が認められ、対友人過失と対友人摩擦との間には相関が見られなかった。身体反応は対人ストレスとの間にのみ中程度の相関が見られた。なお、高揚感とストレスとの間にはなん

表1 尺度得点の男女別平均と差の検定結果

尺度	性別	男子		女子		t	df	p
		平均	SD	平均	SD			
親和動機尺度								
情緒的支持		12.9	3.46	12.9	3.93	0.07	84	
ポジティブ刺激		15.4	3.06	15.2	3.01	0.23	84	
注目		15.5	2.94	16.9	2.17	-2.42	48.71	*
社会的比較		16.0	2.61	16.9	2.25	-1.63	84	
ストレス尺度								
対友人葛藤		9.2	3.26	9.8	3.56	-0.80	84	
対友人過失		7.5	1.96	7.9	2.84	-0.59	84	
対友人摩耗		9.6	3.54	12.4	4.34	-2.97	84	**
対人ストレス		7.7	7.17	10.2	8.43	-1.40	84	
心理的ストレス反応								
不安		5.9	4.86	8.9	5.57	-2.47	84	*
抑うつ気分		9.3	6.89	11.8	7.72	-1.54	84	
怒り		8.5	6.39	9.8	6.42	-0.88	84	
高揚感		10.4	5.33	9.1	4.78	1.19	84	
二次反応								
引きこもり		4.9	3.59	5.3	4.87	-0.34	84	
対人不信		3.4	3.29	4.8	4.06	-1.61	84	
依存		6.5	4.70	8.4	4.78	-1.80	84	
身体反応		4.5	3.95	6.2	4.25	-1.84	84	
N		31		55				

* $p < .05$ ** $p < .01$

表2 親和動機とストレスとの相関

ストレス	親和動機			
	ポジティブ刺激	情緒的支持	注目	社会的比較
対友人葛藤	-.038	-.036	.145	.069
対友人過失	.119	.112	.068	.167
対友人摩耗	.163	.081	.255 *	.229 *
対人ストレス	.105	.031	.057	.120

ら有意な相関は認められなかった。

親和動機と情動反応との相関では社会的比較動機と不安および抑うつ気分との間に有意な正の相関が認められたが、他の親和動機タイプとの間に相関は認められなかった。ポジティブな情動である高揚感については、ポジティブ刺激動機および情緒的支持動機との間

に正の相関が認められ、特にポジティブ刺激動機との相関は非常に高かった。対人行動領域の反応尺度では、依存が4タイプすべての親和動機と正の相関を示し、特に注目動機と社会的比較動機との相関が中程度と相対的に大きかった。また、ポジティブ刺激動機と情緒的支持動機は引きこもりと負の弱い相関を示した。

表3 ストレッサー、親和動機とストレス反応との相関

反応	ストレッサー				親和動機			
	対友人葛藤	対友人過失	対友人摩耗	対人ストレッサー	ポジティブ刺激	情緒的支持	注目	社会的比較
不安	.354 **	.343 **	.374 **	.496 **	.008	.104	.122	.253 *
抑うつ気分	.328 **	.326 **	.407 **	.464 **	-.104	.076	.100	.226 *
怒り	.310 **	.119	.219 *	.435 **	-.076	-.024	.001	.059
高揚感	.011	.088	.005	-.077	.538 **	.271 *	.162	.063
引きこもり	.325 **	.210	.185	.385 **	-.214 *	-.245 *	-.022	.031
対人不信	.464 **	.368 **	.378 **	.560 **	-.055	-.085	.119	.138
依存	.324 **	.335 **	.485 **	.472 **	.220 *	.260 *	.353 **	.345 **
身体反応	.093	.203	.161	.359 **	.062	.095	.105	.114

* $p < .05$ ** $p < .01$

表4 ポジティブ刺激動機×対人ストレッサー高・低群の情動反応平均

情動反応	ポジティブ刺激動機	対人ストレッサー	対友人葛藤			対友人過失			対友人摩耗		
			N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
不安	低群	低群	22	6.4	6.05	18	5.6	5.12	23	7.1	5.40
		高群	19	10.5	4.23	23	10.4	5.15	18	9.8	5.68
	高群	低群	18	4.8	4.32	21	5.9	5.50	17	4.4	4.51
		高群	27	9.0	5.42	24	8.6	5.06	28	9.1	5.12
抑うつ気分	低群	低群	22	10.8	7.59	18	9.7	7.19	23	10.7	7.00
		高群	19	15.2	6.83	23	15.3	6.89	18	15.6	7.33
	高群	低群	18	4.8	5.71	21	7.7	7.86	17	4.8	6.17
		高群	27	12.0	6.59	24	10.4	6.34	28	11.8	6.41
怒り	低群	低群	22	8.8	6.87	18	8.5	5.32	23	9.4	5.76
		高群	19	12.2	5.24	23	11.8	6.78	18	11.5	6.98
	高群	低群	18	5.9	5.42	21	8.3	6.80	17	6.6	6.29
		高群	27	10.1	6.56	24	8.6	6.19	28	9.6	6.33
高揚感	低群	低群	22	6.1	3.25	18	6.8	3.54	23	7.1	4.09
		高群	19	8.1	4.04	23	7.2	3.95	18	6.9	3.33
	高群	低群	18	13.4	5.20	21	11.7	5.86	17	12.4	6.22
		高群	27	10.8	4.53	24	11.9	4.07	28	11.5	4.04

分散分析

親和動機のタイプによってストレッサーに対する感受性に違いがあるかどうかを検討するために、親和動機尺度とストレッサー尺度それぞれの下位尺度ごとに高得点群と低得点群に分け、親和動機4タイプとストレッサー4タイプのすべての組み合わせについて、高揚感を含めた情動反応尺度得点に差があるかどうかを2要因分散分析により検定した。その結果、ストレッ

サーのうち、友人関係以外の人間関係におけるストレッサーを測定した対人ストレッサーについては、どのストレス反応尺度にも有意な交互作用が認められなかった。また、情緒的支持動機については、どのストレッサータイプとの組み合わせにおいても有意な交互作用は見られなかった。

有意な交互作用が認められたのは、以下の5つのケースである。まず、高揚感に対するポジティブ刺激動機

表5 注目動機×対人ストレス高・低群の情動反応平均

情動反応	注目動機	対人ストレス	対友人葛藤			対友人過失			対友人摩擦		
			N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
不安	低群	低群	26	5.3	5.66	19	3.6	4.45	26	5.1	5.21
		高群	16	9.7	4.80	23	9.8	5.15	16	10.1	5.25
	高群	低群	14	6.3	4.83	20	7.8	5.27	14	7.5	4.90
		高群	30	9.6	5.13	24	9.2	5.21	30	9.0	5.37
抑うつ気分	低群	低群	26	7.8	7.78	19	5.8	6.02	26	7.8	7.11
		高群	16	14.3	6.53	23	14.0	7.44	16	14.3	7.75
	高群	低群	14	8.7	6.79	20	11.3	7.95	14	8.7	7.62
		高群	30	12.8	6.98	24	11.7	6.49	30	12.8	6.58
怒り	低群	低群	26	7.7	6.51	19	6.8	4.73	26	7.7	5.99
		高群	16	11.1	6.09	23	10.7	7.31	16	11.0	6.96
	高群	低群	14	7.2	6.24	20	9.9	6.94	14	9.3	6.32
		高群	30	10.9	6.16	24	9.7	5.98	30	10.0	6.47
高揚感	低群	低群	26	8.0	5.43	19	9.1	5.54	26	9.1	5.53
		高群	16	9.7	3.48	23	8.3	4.20	16	7.9	3.34
	高群	低群	14	11.9	5.05	20	9.8	5.49	14	9.8	6.17
		高群	30	9.7	5.01	24	10.9	4.76	30	10.7	4.57

と対友人葛藤ストレスの交互作用 ($F=6.09$, $df=1/82$, $p<.05$) で、単純主効果の検定結果より、ポジティブ刺激動機高群ではストレスが高まると高揚感に低下傾向が見られたが、ポジティブ刺激動機低群ではストレスの高低による違いは見られなかった (表4)。なお、高揚感の高さはストレスのレベルに関わりなくポジティブ刺激動機高群の方が有意に高かった。2番目と3番目は、注目動機と対友人過失ストレスの交互作用で、不安 ($F=4.78$, $df=1/82$, $p<.05$) と抑うつ気分 ($F=6.65$, $df=1/82$, $p<.05$) の2つの情動尺度で有意であった (表5)。いずれの尺度においても、注目動機低群ではストレス低群より高群で有意に得点が高くなるのに対して、注目動機高群ではストレス低群と高群に差がなく、高水準の反応が生起していた。つまり、注目動機高群は対友人過失ストレスがわずかでも不安や抑うつ気分が高まりやすいことになる。4番目は、不安に対する社会的比較動機と対友人葛藤ストレスの交互作用 ($F=6.41$, $df=1/82$, $p<.05$) で、単純主効果を検定した結果、社会的比較動機低群ではストレス低群より高群で有意に不安が高まるのに対して、社会的比較高群ではストレス低群でも高群と同程度に高い水準で反応が生起していた (表6)。社会的比較動機が高い人は対友人葛藤ストレスがわずかでも不安を喚起させやす

いと言える。5番目は、怒りに対する社会的比較動機と対友人過失ストレスの交互作用 ($F=4.51$, $df=1/82$, $p<.05$) で、単純主効果を検定した結果、社会的比較動機低群ではストレス低群より高群で有意に怒りが高まるのに対して、社会的比較高群ではストレス低群でも高群と同程度に高い水準で怒り反応が生起していた。社会的比較動機が高い人は対友人過失ストレスがわずかでも怒りを喚起させやすいと言える。

その他に、2つのケースで交互作用が有意傾向にあった。ひとつは高揚感に対する注目動機と対友人葛藤の交互作用 ($F=3.14$, $df=1/82$, $p<.10$)、もうひとつは怒りに対する社会的比較動機と対友人摩擦の交互作用 ($F=3.24$, $df=1/82$, $p<.10$) である。前者は第1のケースであるポジティブ刺激動機と対友人葛藤ストレスの交互作用に類似しており、後者は第5の社会的比較動機と対友人過失ストレスの交互作用に類似した結果となっている。

考察

本研究では、情動を中核とする心理的ストレス過程モデルの枠組みの中で、親和動機がストレス過程に及ぼす影響を検討した。親和動機は外在的要因として心理的ストレス過程のさまざまな局面に影響を与える可

表6 社会的比較動機×対人ストレス高・低群の情動反応平均

情動反応	社会的比較動機	対人ストレス	対友人葛藤			対友人過失			対友人摩擦		
			N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
不安	低群	低群	22	3.5	4.14	18	3.8	3.84	22	4.4	4.29
		高群	19	10.1	4.43	23	8.7	5.41	19	9.1	5.41
	高群	低群	18	8.3	5.59	21	7.5	5.78	18	7.9	5.59
		高群	27	9.3	5.37	24	10.2	4.86	27	9.6	5.30
抑うつ気分	低群	低群	22	5.5	6.19	18	5.2	5.35	22	6.2	6.55
		高群	19	12.7	6.78	23	11.7	7.52	19	11.9	7.17
	高群	低群	18	11.3	7.58	21	11.6	7.96	18	10.6	7.42
		高群	27	13.8	6.89	24	13.9	6.43	27	14.3	6.76
怒り	低群	低群	22	6.3	6.48	18	5.9	4.64	22	6.5	5.68
		高群	19	11.3	5.34	23	10.7	6.88	19	11.0	6.52
	高群	低群	18	8.9	6.02	21	10.5	6.45	18	10.3	6.04
		高群	27	10.8	6.62	24	9.6	6.44	27	9.9	6.71
高揚感	低群	低群	22	9.0	6.18	18	9.8	5.39	22	9.8	6.23
		高群	19	10.2	3.97	23	9.3	5.24	19	9.3	3.97
	高群	低群	18	9.9	4.85	21	9.2	5.63	18	8.8	5.09
		高群	27	9.3	4.87	24	9.8	4.07	27	10.0	4.66

能性があるが、本研究では特にストレスとなる刺激事態の生起に及ぼす影響、ポジティブまたはネガティブな情動性との相関によるストレス反応への影響、そしてストレスの感情的インパクトの強さへの影響の3点に焦点を当てた。親和動機については追求される社会的報酬のタイプに基づく Hill (1987) の4タイプ、ストレスについては橋本 (2005) の対人ストレスイベントの3分類の枠組みを利用した。

心理的ストレス過程への影響について

親和動機とストレスの相関分析の結果、注目動機と社会的比較動機が高い人は対友人摩擦ストレスをより強く経験する傾向にあることが示唆された。相手に起因する対人葛藤や自分に起因する対友人過失の経験は、相手や自分の社会的スキルや行動傾向、あるいは関係を取り巻く状況的要因などによって影響を受けやすく、個人の親和動機によって左右されることは少ないものと推測された。それに対して、相手への配慮や気遣いに起因する摩擦ストレスについては、相手からの賞賛を求める注目動機が高い人ほど経験しやすいと予想され、結果はこの予想を支持するものであった。しかし、ネガティブな反応を恐れるポジティブ刺激動機の高い人についても対友人摩擦を経験すると予想したが、その予想は支持されなかった。そのかわりに社会的比較動機の高い人ほど経験しやすいこと

が示唆された。社会的比較動機が高い人は、相手に抱かれる印象への配慮ではなく、自己評価の不確実性のために率直な自己表現を抑制する傾向があると考えられる。なお、親和動機とストレスとの相関は有意ではあるものの効果としては弱いものであり、スキルや能力などの要因と比較すると、経験されるストレスへの影響は小さいと言える。

第2に、親和動機がポジティブまたはネガティブな情動性と相関がある場合、情動ストレス反応の定常的な生起レベルを高める可能性が考えられた。まず、社会的比較動機は不安の高さと相関すると予想され、結果はこの予想を支持するものであった。社会的比較動機は抑うつ気分とも有意な相関を示した。また、ポジティブ刺激動機とポジティブな情動性（高揚感）との相関が予想され、これも支持された。弱いとはいえ情緒的支持動機もポジティブ刺激動機と同様に高揚感と有意な正の相関を示したが、ポジティブ刺激動機と情緒的支持動機との相関がきわめて高い ($r=.527$) ことから、ポジティブ刺激動機を統制した情緒的支持動機と高揚感の偏相関は -0.018 となり、疑似相関の可能性がある。

本研究では対人行動領域での二次反応への影響についても探索的に検討した。その結果、親和動機4タイプすべてが依存を高めていることが明らかにされた。

特に、注目と社会的比較動機と依存との間には中程度の正の相関が認められた。このことは、PSRS-50Rにおいて依存はストレス過程における二次反応として位置づけられているが、同時に特性親和動機に基づく親和行動としての側面もあることを示唆している。二次反応尺度は情動反応尺度とセットで解釈すべきであるとされるが、特に依存尺度得点の解釈には慎重さが求められる。また、ポジティブ刺激動機と情緒的支持動機は引きこもりを抑制することも示唆された。この2つのタイプの親和動機はいずれもポジティブな情動である高揚感と正の相関を持ち、高揚感を統制した時のポジティブ刺激動機と引きこもりの偏相関は -0.001 、 $(p>.10)$ 情緒的支持動機との偏相関は -0.156 $(p>.10)$ で、直接的な関連は見られなくなる。したがって、これらの動機が引きこもりを抑制したのは高揚感を媒介にした効果であると考えられる。

第3に、親和動機のタイプによって特定タイプのストレスラーに対する感受性が異なり、経験されたストレスラーの感情的インパクトが異なるだろうという予想について検討した。分散分析の結果は、限定されてはいるものの、親和動機タイプとストレスラーの内容の組み合わせによって情動反応の生起水準に違いがあることが示唆された。親和動機とストレスラーとの間に有意な交互作用が5ケースで、有意傾向が2ケースで認められた。まず、ポジティブ刺激動機あるいは注目動機が高い人は強い対友人葛藤ストレスラーを経験すると高揚感が低下する傾向があることが明らかにされた。ポジティブ刺激動機の高い人にとって対友人葛藤も対友人過失も、他者とのポジティブな交流を妨げるという点で共通しており、強いインパクトを受けるのではないかと予想したが、対友人葛藤のみその傾向が認められ、またネガティブな情動が高まるのではなく、高揚感が低下するという形で反応が生じていた。相手からの賞賛を求める注目動機の高い人にとっても、対友人葛藤は同様に大きな脅威であることが示唆された。また、注目動機が高い人は対友人過失ストレスラーに対する感受性が強く、わずかなストレスラーに対しても不安や抑うつ気分といった情報反応が高まる傾向が認められた。他者からの賞賛を求める人にとって、対友人過失ストレスラーは他者に与える自己イメージにとって大きな脅威となるため、感情的インパクトが強くなったものと解釈でき、予想を支持する結果と言える。一方、社会的比較動機が高い人についても同様な結果を予想したが、結果はやや異なっていた。結果によれば、社会的比較動機が高い人の場合は対友人過失および対友人摩擦ストレスラーに対する感受性が強く、その反応は怒りとなって表れやすい。もともと社会的比較動機が高い人は不安水準が高い傾向にあるが、

ストレス反応として怒りが優勢となったのは、ストレスラーによって不安が解消されないこと、あるいは比較できる他者がいないことによるフラストレーションによるものと推測される。

展望と課題

本研究では情動を中核とする心理的ストレス・モデルの枠組みの中で親和動機の影響を検討した。これまでストレスと親和動機の関係については、Schachter (1959) に始まる親和研究以降、ストレスフルな状況における親和行動に焦点が当てられてきたが、本研究の関心は親和動機が心理的ストレス過程に及ぼす影響であり、方向性が異なっている。そのために、ここでは親和動機を個人特性的な素因として捉え、心理的ストレス過程に影響を与える外在的要因としてストレス・モデルの中で分析することを試みた。その結果は、限定的ではあるものの、親和動機の強さが心理的ストレス過程のいくつかの局面で特徴的な影響を与えていることを示し、モデルの有効性を確認することができた。

しかし、いくつかの点でさらに検討を加えるべき問題が残されている。ひとつは性差の問題である。本研究では尺度得点の平均に顕著な性差が認められなかったこと、また調査対象者数が少なかったことから、性差について十分な分析を行っていない。尺度得点に差がないことから、ストレス過程への影響の仕方にも性差がないとは言えない。親密な人間関係の持ち方にはさまざまな性差が認められることから、調査対象者数を増やして、男女別に分析する必要がある。

また、本研究では対人ストレスラーの中でも特に友人関係の中で生じる出来事に焦点を当てた。それは大学生が日常生活で経験する可能性のあるストレスラーの中でも、重要度が高いものと考えられたからである。しかし、実際にストレス反応と最も大きな相関を示したのは、友人以外の人間関係で経験する対人ストレスラーであった。実際、本研究の主たる目的とは関連がないことから詳細は示さないが、心理的ストレス反応を従属変数とした重回帰分析の結果によれば、対人ストレスラー尺度だけでもストレス反応を相当程度説明できた。また、橋本 (2005) によれば、相手人物との関係性が違えば経験される対人ストレスラーの内容も異なっている。本研究では友人関係で生じるどのような出来事に敏感に反応しやすいかという点で、親和動機のタイプによる違いがあることを明らかにしたが、どのようなタイプの人間関係でのストレスラーに敏感かという点にも、親和動機のタイプによる影響が考えられる。

最後に、親和動機がストレス過程に及ぼす影響について、まだ未検討の問題が残されている。本研究では心理的ストレス過程の中の、ストレスラーとなる刺激

事態の経験から、情動反応と一部の二次反応までのプロセスについて横断的に検討したに過ぎない。しかし、心理的ストレス過程で次の段階で問題になるコーピングのプロセスにおいても、親和動機が影響を及ぼす可能性がある。特に親和動機のタイプのひとつである情緒的支持動機は、代表的なストレス・コーピング方略のひとつであるサポート希求と密接な関わりがある。情緒的支持動機の強さによって、コーピング方略の選択やその効果が異なることが予想される。また、他の親和動機タイプでも特徴的なコーピング方略があることも考えられる。本研究の結果を踏まえ、これらの問題についても今後検討していく必要がある。

文 献

Buss, A.H., 1983, Social rewards and personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **44**, 553-563.
 Buss, A.H., 1986, *Social Behavior and Personality*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
 Festinger, L., 1994, A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
 古屋健・音山若穂, 1999, HRMのための尺度・チェックリスト 2. 従業員用尺度・チェックリスト (8) ストレス. 日本労働研究機構調査研究報告書No.124 雇用管理業務支援のための尺度・チェックリストの開発——HRM (Human resource management) チェックリスト—— (p.102-203). 東京: 日本労働研究機構.
 古屋健・坂田成輝・音山若穂, 2001, 心理的ストレス過程とパーソナリティー: 予備的分析 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 **50**, 305-328.

古屋健・坂田成輝・音山若穂・所澤潤, 1994, 教育実習生のストレスに関する基礎的研究群馬大学教育実践研究, 第11号, 227-240頁.
 橋本剛, 1997, 大学生における対人ストレスイベント分類の試み. *社会心理学研究* **13**, 64-75.
 橋本剛, 2005, 対人ストレス尺度の開発. *人文論集*, **56**, A45-A71.
 Hill, C. A., 1987, Affiliation motivation: People who need people... but in different ways. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1008-1018.
 Hill, C. A., 1991, Seeking emotional support: The influence of affiliative need and partner warmth. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol 60, 112-121.
 Murray, H. A., 1938, *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press.
 新名理恵, 1994, ストレス反応の測定——心理検査 *CLINICAL NEUROSCIENCE*, **12**, 530-533.
 新名理恵, 1995, 介護の心理的ストレス・モデル ストレス科学, **10**, 220-223.
 新名理恵・坂田成輝・矢富直美・本間昭, 1990, 心理的ストレス反応尺度の開発 心身医学, **30**, 29-38.
 岡島京子, 1988, 親和動機測定尺度の作成 (尺度構成とその妥当性), 日本教育心理学会総会発表論文集, **30**, 864-865.
 Schachter, S., 1959, *The psychology of affiliation*. Stanford, CA: Stanford University Press.
 Rofé, Y., 1984, Stress and affiliation: A utility theory. *Psychological Review*, **91**, 235-250.

要 約

本研究の目的は、親和動機が心理的ストレス過程に及ぼす影響を分析することである。86名の大学生を対象に、Hill (1987) のIOS日本語版、橋本 (2005) の対人ストレス尺度、新名 (1994) の心理的ストレス反応尺度 (PSRS-50R) が実施された。相関分析の結果、注目動機と社会的比較動機が高いほど対人摩擦ストレスを経験しやすいことが示された。また、社会的比較動機と不安、抑うつ気分の間、またポジティブ刺激動機、情緒的支持動機とポジティブな情動の間に正の相関が認められた。また、分散分析の結果、注目動機が強い人ほど対人過失ストレスに敏感に反応し、小さなストレス者に対しても強い不安、抑うつ気分を示すことが示され、親和動機のタイプによって対人ストレス者に対する感受性が異なることが示唆された。

キーワード: 心理的ストレス過程、親和動機、対人ストレス者、大学生